**週刊やすいゆたか第37号12年６月21日**

**緊急のお知らせ
「やすいゆたかの部屋」サーバートラブル**

<http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/>

**６月21日から突然消えています。原因はサーバーの故障です。無事復活してくれることを祈っております。**

**世阿弥の謡曲にみられる仏教思想**

**⒊．『砧』―夫への想いが強すぎ地獄で苦しむ女**

**砧打つ音がいつしか法華経の読経となりて白道を往く**

ワキは九州芦屋某で、訴訟のため在京して三年になる。九州のことが気掛かりで、侍女を下して、今年の暮れには帰ると告げさせた。前シテの妻は、音信なく待たされた苦しみを訴え、夫に思いを届けようと、唐の蘇武の故事にならい砧(きぬた)を打って京までその音を届かせようとする。ところが夫から今年の暮れも帰れなくなったとの知らせが届き、さては自分への想いが薄れたせいかと心乱れて、病の床に打ち沈み、ついに帰らぬ人になってしまった。

その知らせを聞いて夫は故郷に戻るが、そこに後シテの妻の亡霊が出て、余りに想い焦がれる気持ちが強すぎたので、邪淫の罪で責め苛まれ、砧を無理やり打たされ涙は火焔となって身を焦がして苦しめられているという。

つまり地獄は悪いことをしたから行くだけでなく、在世での苦悩が強すぎると、死後もその思いが残って往生できず、苦しみ続けるということらしい。そこで砧打つ音から夫は法華読誦を思いついて、法華経の力で往生させたということである。法華読誦というが、おそらく「南無妙法蓮華経」の唱題かもしれない。その方が単調な繰り返しが砧打つ感じに合っているので。

この話は妻が三年間も待たされ続けて、そのあまり夫の愛が信じられなくなって病に沈みついに死んでしまった可哀想な話である。罪は夫にこそあるはずなのに、妻が地獄で苦しめられている。確かに訴訟や何かで都を離れられない事情があったかもしれない。それならそれでこまめに手紙を書くとかしないと、夫が都で別の女が出来たために、帰らないのではないかと心配しても当然である。当時は一夫一婦制が確立していたわけでない、都に別の女とできてしまっても、夫の方に世間的には咎められることはないのだ。

ところがそういう嫉妬や夫のいない寂しさなどの人間的な感情は、煩悩それも淫欲の情と決め付けられる。夫の帰りをせかせるために届けと砧を叩くことも、夫への呪いとして咎められ、地獄で砧を叩き続けなければならない 報いを受けるのだ。

それでは世阿弥もこの妻の思いを罪深く、地獄で苦しんで当然と考えていたのだろうか。もちろんそのように描いている以上、妻の行動は煩悩であり、そういう夫への妄執に取り付かれていては何時までも地獄から抜け出せないという仏教思想を語っているわけである。しかし、妻の夫への焦がれる想いが純粋で、強すぎたので、待ちわびて死んでしまったのは、実にいたましいことである。その悲劇への憐憫がひしひしと伝わるから、この妻の死や地獄落ちは不条理の極みだと感じていただろうと思われる。

せっかく結婚しても夫は都に出たきり戻ってこず、待たされ続けるのは地獄のような苦しみなのだろう。そのせいで死んでしまった女は、きっと悔しい思いで成仏できないはずである。そこで夫が 『法華経』で成仏させたという。なぜ『法華経』にはそれほどの功徳があると思われたのか。それは恐らく『法華経』というのは久遠の本仏である釈迦如来がいつか現れて、全ての衆生を救済されるというありがたいお経だからである。

だから夫を想い、辺地の寂寥の中で、ひたすらに帰りを待ち続ける願いが真実ならば、久遠の本仏は必ず皆をいつかは救うように、必ず夫は帰ってくる。三年目の暮れには戻れなくても、四年目にはあるいは十年目には、そしてたとえ今生では逢えなくても、生まれ変わって必ず真実の夫と出会えるのである。

いや、それは永遠の過去に既に出会っているし、たとえ今は別れていてもまた必ず出会えるのである。 釈迦如来は既に永遠の過去に覚りを開かれ、我々に法を説かれているのである。だから夫に対して心の中に常に変わらない思慕を懐き続けている限り、常に共にいるのと言えるのである。だから砧の単調な音は、夫の帰えらないことを恨み、呪う想いが入っていたかもしれないが、常に夫と共に生きているというメッセージを送っていたわけだから、それは久遠実成の 『法華経』でもあったわけである。

だから夫は『法華経』を唱えることで、妻を成仏させることができたということである。天台智顗は「十界互具」「一念三千」の教義を唱えた。地獄の苦しみの中に仏の境地もあるということである。たしかに夫の帰りを願う妻の想う一念には、夫を性的に独占したいという淫欲もあるかもしれないし、辺地に一人残されたことへの恨みもあるだろうが、真実の愛に生きようとする不滅の願いもあるわけなのだ。『法華経』の読経を通して、妻の一念の中の仏の部分が大きくなって成仏できるということなのだ。

ただ天台本覚思想でいくと、煩悩の中に涅槃があるにしても、逆にそういう涅槃も煩悩の炎に身を焦がすことの中にこそあるということになるから、地獄の苦しみは永遠に続くことにならないのかということになる。そこで世阿弥は、その絶対矛盾を能の舞台に表現することによって、人間存在の哀しみを謳いあげ、砧打つ音と読経とをかぶせて幽玄の世界を作り上げることで、一つの浄土を舞台に作り上げたのである。

**⒋．『檜垣』と『姥捨』―女の魂は美と官能の地獄に永劫に苦しむ**

**永劫にその魂は離れまじ白河の水更科の月**

『檜垣』のワキは肥後岩戸山の僧である。その白河に閼伽(あか)の水を汲む百歳にも見える老女がいた。その名を尋ねると**「年ふれば我が黒髪も白河の水は汲むまで老いにけるかな」**と詠んだ檜垣の白拍子だったという。年老いてから白河の辺に庵を結んでいたからその跡を弔って欲しいという。

これは往生できずに苦しんでいる霊に回向を頼まれたと思い、探しあてていくと現れた老女は痛ましい姿だが白拍子の時の罪が深くて熱鉄の桶を荷、猛火の釣瓶を提げて水を汲み熱湯を浴びているという。回向に来た僧のために水を汲み、「年ふれば」の歌の謂れを語る。藤原興範が老女が白河の辺で暮らしていた時に水を所望したので、水を汲んで差し上げたら、昔白拍子だった面影があるので、興範がしきりに舞って見せてくれるように頼むものだから、恥ずかしながら老醜を晒して舞ってしまったという思い出を語りながら、舞を舞う。そして成仏を僧に願うと言う話である

　坂口安吾は『青春論』「一わが青春」(「坂口安吾全集⒕」ちくま文庫、筑摩書房一九九〇（平成⒉）年)で、若い美しい自分に執着して、老醜の苦しみが強すぎて往生できなかったようだ。僧の前で在りし日の姿を追うて恍惚と踊り狂ったことで妄執が晴れて成仏できたと解釈している。

それほどに女性というものは若くて美しいということが大切なのである。とくにそれが売りで生きてきた白拍子にとっては、老いて醜くなっていくということは耐え難い苦痛だったのである。坂口は『檜垣』の話を宇野千代に聞かせたら、宇野はよほどその話に胸を打たれたらしくて、それ以来謡曲にのめり込んだということである。一八九七年から一九九六年までほぼ一世紀を生きた宇野だがこの話を聞いたのが四十代の半ばごろだったらしい。

　彼女は尾崎士郎、東郷青児、北原武夫と、多くの有名芸術家との結婚遍歴と破局を繰り返す波乱万丈の人生を送っており、『色ざんげ』なる東郷青児をモデルにした小説を書いている。まさしく『檜垣』の白拍子と自分の人生が重なったのであろう。

『姥捨』のワキは都から来た旅の僧である。信濃の棚田の田毎の月で有名な更科の月を眺めようと姨捨山にやってきた。すると、一人の女が現れる。ワキが姥捨の跡を問うと、女は『万葉集』の読み人知らずの**「我が心慰めかねつ更科や　姨捨山に照る月を見て」**の跡を教える。ここに捨てられた人はそのまま土になって埋もれてしまったがその執心は残っているという。そして今夜は月の出と共に現れて夜遊を慰めようと言って姿を消す。

つまりあまりの美しい更科の月を愛でて遊ぶことが素敵なので、成仏しきれないで姥捨てで捨てられた老女までが、名月の夜に霊として現れたのだ。老女は月を愛で、月は勢至観音だと語り、田毎の月は無辺光で浄土に誘っているという。そして昔のごとく舞を舞う。昔の秋(とき)を返せと妄執を語るのだ。夜が明けると都の人は帰り、また、姥捨山になってしまう。

だからこの曲は姥捨の悲惨を嘆くというよりも、更級の月のカタルシスが強烈で、たとえ姥捨られた後もその思い出は永遠に朽ちないで残っているということがテーマなのかもしれない。つまり老女の妄執の中にこそ菩提があるということで、煩悩即菩提なのである。

美しい女の罪は永劫に消えない。だから美しかった女は、死後も永劫にその罪を地獄の業火に身を焦がして償わなければならないのである。『檜垣』の女も『姥捨』の女も美しい舞を舞い、男心を狂わせたのだから、その報いは永劫に受けなければならないだろう。

だから私は脇僧が念仏や法華経を唱えたぐらいでは成仏できないような気がする。だってどちらも結局、老醜を晒しても舞を舞って官能の世界に脇僧を誘おうとしてしまうのだから。それは美しすぎた女の魂は、美と官能の世界から離れることはできないということなのだ。だから浄土はむしろ億万土離れた西方にあるのではなくて、この白河や更科にこそあるのである。

そしてたとえ老醜となろうとも、身は朽ち果てて魂だけになってしまっても、澄んだ水、夜空に照り輝く月を見て、舞に興じる刹那に若く美しいままに永遠に生きているのである。それは億万年後に現れる仏と、二千五百年前に現れた釈尊と、億万年前に現れた仏が別物ではなく、我々の念仏や読経と共に現れる仏として永遠の今を生きているのと同じことなのである。

**マクルーハン『人間拡張の原理』より
―ネオヒューマニズムの先駆けとして**

**アルファベットが個人を部族から解放した？**

表音文字は、象形文字や中国の表意文字にある、意味や観念の世界を犠牲にしている。しかし、これらの文化的にはより豊かな文字形態は、部族の呪術的な、連続性を欠いた伝統的ことばの世界から、冷たい画一的な視覚媒体の世界へ突然に変換する手段をなにも人間に与えなかった。表意文字が長い世紀にわたって使用されていた中国の社会では、家族と部族が微妙にからんで継ぎ目のない網となり、外からの脅威を受けることがなかった。それにひきかえ、今日のアフリカでは、二千年前のガリア(古代フランス)がそうであったように、アルファベットの文字を覚えて一世代も経れば、少なくともまずはじめに個人を部族の網から解き放てるのである。

この事実はアルファベットで綴られたことばの「内容」とは関係はなく、人間の聴覚経験と視覚経験との間に突然裂け目ができた結果である。表音アルファベットだけが経験にそのような鋭い区別をつくり、それを使う人に耳のかわりに目を与え、響き合うことばの魔力に縛られ、血族の網の中にいた彼らを解き放った。

次に、表音アルファベットだけが「文明人」ーつまり、成文法の前に平等な一人一人の個人ーをつくり出したのか、ということが問題になる。分離された個人、空間と時間の連続性、それに法律の普遍性は、文字文化の、また文明社会の主要な特徴である。インドや中国のような部族的文化は、観念や表現の幅と微妙さにおいて、西欧文化をはるかに凌駕するものであろう。しかし、われわれはここでは価値評価に関わっているのではなく、社会の形態を問題にしているのである。部族的文化では、個人あるいは個々の市民という存在は考えられない。彼らの空間や時間の観念は連続的なものでも、画一的なものでもなく、相互に感応し合う、濃い密度をもったものである。アルファベットの「伝えるもの(メッセージ)」は、その視覚上の画一性と連続性という特質を拡張する力であって、もろもろの文化はこれに感化されるのである。(９書かれたことば106～108頁)

あらゆるメディア、すなわち「人間の拡張」を利用することによって、われわれの全感覚の間の配分比率が変わるように、人間の相互関係の模様が変わってゆく。

 　あらゆる技術は、力と速度を増すための、われわれの身体あるいは神経組織の拡張である。これが本書の一貫したテーマである。もしこのような力や速度の増大がなかったなら、われわれの新しい拡張はそもそも起こらなかったであろうし、かえりみられることもなかったであろう。どのような要素で構成された集合体にしろ、その力や速度が増大すると、それ自体が何らかの分裂を起こし、組織の変化をもたらすのである。

社会集団の再編成や新しい共同体の形成には、紙のメッセージや道路運搬の手段によって、情報の速度培大が伴うのである。このスピード・アップによって、より離れたところからの統御が可能になる。歴史的にみれば、これがローマ帝国の成立と、それに先立つギリシアの都市国家の崩壊をもたちした原因である。紙とアルファベットを使うようになり、速く走れる堅い道路の建設が促がされる以前は、城壁をめぐらした町や都市国家が、永続的な自然な形態であった。

村落や部市国家は、本質的には、あらゆる人間の欲求と機能を包括する形綬である。速度が速まり、そして遠くからの軍事的支配がより強化され

始めると、都市国家は崩壊する。かつては内包的

で自己充足的であった部市国家内の欲求や機能は、帝国のもろもろの専門分化した活動を通じて拡張して行ったのである。この速度が速まるにつれ、商業的にも政冶的にも、諸機能は分離し、組織を分裂と崩壌の方向に促進するようになった。
(10道路と紙のルート114頁)